

2/21 福田

第1景 超高齡社會

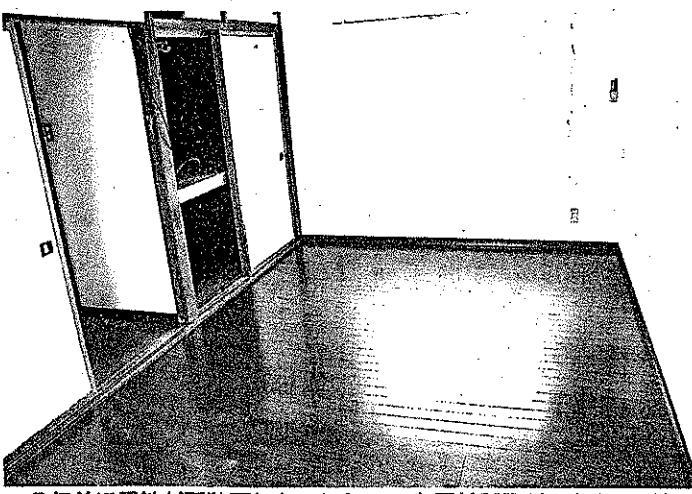
5年前、1人暮らしひの50代男性は、6畳間の布団の上で死んでいた。白線が入った黒のジャージ姿で、両手を広げて横たわっていた。

福井市内の「シネマシティ」で、足元の電気ストーブはついたまま、胸には食べさじのミカンが転がり、ポットのお湯は保温になっていた。

① 死を招く孤立

「あかん」と嘆息を吐く。「そんなのどうでもいいんだよ。」と邊りへこむ。「そんなんがうるさい」と邊りへこむ。「うるさい」と邊りへこむ。「うるさい」と邊りへこむ。

国勢調査によると、県内の高齢者（65歳以上）の1人当たりは2000年には1万4790人だったが、15年は2万7161人と83・6%増。高齢者の8人に1人で、複数の福祉関係者は「孤独死」を表現する。敦賀市自立促進支援センターの道上利子さん（53）は「高齢者の孤立は大きな課題」と話す。



5年前に男性が孤独死したマンションと同じ間取りの部屋。男性は窓側に敷かれた布団の上に横たわっていた=福井市内

ある推計によれば、福井県の人口は2040年に63万人になると云つ。自治体の消滅する危ぶまれる未開発の変化は、私たちの暮らしに大きく影響し、新たな価値観を生みだすのだろう。「幸福度日本一」の福井で、この先も幸せに生きていけるか? 「超高齢社会」や「働き方」などテーマで「とことん人の痛みを追いかけ、そ

「は」自立した生活を維持し
「すこ」と指摘する。
県内の市町では「人暮らし」
の高齢者に、配食サービスを行っているが、福井市のある
民生委員は「自分の部屋を見
られるのが嫌で、拒むれる
こともある」。高齢者自らが
社会の扉を開こうケースは少
くない。

■ ■ ■

その民生委員にも高齢化の
波が押し寄せる。県内183
人の平均年齢は65・5歳
で、'04年に比べ4・4歳上昇。
多くの民生委員は「認知症へ
の声かけや振り込め詐欺防止
の普及啓発など、仕事は増え
る一方、なり手は「なくなる」と口をそろえる。
村山特任講師は「地域の高
齢者福祉は住民の志に頼って
きた。しかしボランティア精
神に頼り続けるのは危険。少
額であっても継続的に報酬が
入る仕組みなどを考えていく
必要がある」と強調する。
・社会構造の変化とともに家
族や地域の人間関係が崩れ、
高齢者が置き去りになってしま
う。福井市地域包括支援セン
ターの担当者は書いた。「向こ

男性は糖尿病を患い、右の足先は壊死し黒く変色していく。足を引きずりながら大家に家賃を持って歩いていたが、次第にできなくなつた。部屋の台所には小さな鍋があり、炊飯器はあつたが本炊している様子はなく、カツラーメンが常に何個か置いてあった。

大家には「医者は『あれ食べたらあかん』『これ食べた

一つ。炊飯器はあったが自炊している様子はなく、カップラーメンが常に何個か置いてあった。

家族、地域の絆どこへ

掲載します

【三西に於ける論事】

堀文庫

連載「ふくいを生きる」の感想、意見を募集しています。連載は樋井新聞ホームページからもご覧になれます。編集局社会部=☎0776(57)5110、FAX0776(57)5145、メールはhoudou@fukuishimbun.co.jp